

知的障害のある生徒に対するオンラインでのジョブコーチングについての質的研究

研究分担者 前原和明 秋田大学・教育文化学部

【研究要旨】

本研究では、特別支援学校における職場実習後のオンラインを用いた適応指導の分析を通じて、オンラインでのジョブコーチングの視点について抽出した。得られた①体験の言語化、②記憶の喚起、③目標の設定、④認識の比較、⑤オープンクエスチョンからクローズドクエスチョンへの5つの工夫は、対面でも有効な視点であるが、オンラインでの指導であるからこそ、より強調して取り入れる必要であると考えられた。今後のテレワークに向けた支援や訓練の一つとして、この種の工夫等についてさらなる整理分析が必要であると言える。

A.研究目的

近年、日本では、情報を活用する能力は、言語能力と同様に発達において基本的な能力であるため、ICTを使用するための環境整備とICTを活用した授業の充実が、学校において取り組まれている。

ICT機器は知的障害のある生徒にとって有用なツールである。実際、知的障害を対象生徒とする特別支援学校におけるICTを活用した様々な実践が確認できる(水内・青山・山西, 2018; 山崎・水内・山西, 2019; 澤田, 2019; 藤原ら, 2021; 高津ら, 2021)。近年、文部科学省が「GIGAスクール構想」と呼ばれる、ICT機器を活用した子どもの力を最大限引き出す教育の推進に取り組んでいる(文部科学省, 2021)。知的障害を中心とした障害者の支援において、ICT機器は、認知的側面を補うための効果的なツールとして活用できると言われている(全国特別支援学校知的障害教育校長会, 2016)。しかし、その一方で、このICT機器を用いた具体的な支援のあり方、工夫点や配慮といったことは明確にされておらず、さらなる実践知の蓄積が求められる。

そこで、本研究の目的は、知的障害のある生徒に対するオンラインでのジョブコーチングにおける工夫を明らかにすることである。

B.研究方法

1. 調査内容

本研究では、特別支援学校における産業現場での職場実習のオンラインでの適応指導場面を調査対象として分析を行った。2022年6月に、高等部教諭の知的障害のある1名の生徒のオンラインでの適応指導、約60分程度の記録動画を分析した。

2. 分析方法

知的障害者のオンラインでの適応指導を行う上での工夫や配慮等は何かとの観点を持ち、実践者のやり取り記録からポイントとなるエピソードを抽出した。

3. 倫理配慮について

本調査は、秋田大学手形地区における人を対象とした研究倫理審査委員会(2021年6月7日付, 第3-6号)の承認を経て実施した。

C.研究結果

知的障害のある生徒に対するオンラインでの適応指導の工夫や配慮等として、①体験の言語化、②記憶の喚起、③目標の設定、④認識の比較、⑤オープンクエスチョンからクローズドクエスチョンへの5つが抽出された。

以下にその詳細を示す。

【体験の言語化】

この「体験の言語化」とは、適応指導を行う教師が、

知的障害のある生徒が当日の実習体験を具体的に言語化するための関わりのことである。教師は、生徒が

体験を言語化できるように、語りかけのイントネーションやスピードを調整等する工夫を取り入れていた。

〈エピソード〉

教師	「で、それで、疲れはどうなの？あるの？ないの？」
生徒	考え込む間があった後に「…あります…」
教師	その返答を受けて、左手を前に突き出しながら、声量を上げて言葉を強調しながら「やっぱりね！だと思っよ！だっさ、ないわけ、ないもん。」
教師	次は、声量抑えて、ゆっくりと「それ、すごく大事なことで…、実習中にそういう、あーいった立ち仕事を、ずーっと同じ場所で、立ち仕事するって、初めてじゃないですか？」と返事を促す。
生徒	きっぱりと「はい！」と返事をする。
教師	その返事を受けて「疲れて当然だと思うので…」と返事を待つ。
生徒	考え込むように、ゆっくり「はい」と返事。
教師	その返事を受けて「その疲れを、ぜひあの感じて、仕事って大変なんだなと思ってもらえると先生たちはうれしいです。」と語りかける。
生徒	きっぱりと「はい」返事。
教師	「ぜんぜん、その疲れがあるというのは悪いことではないので、その疲れもありながらも、どういう仕事をしているかって、というのを後2日、C工房の実習で頑張っ欲しいですね。」
生徒	「はい」

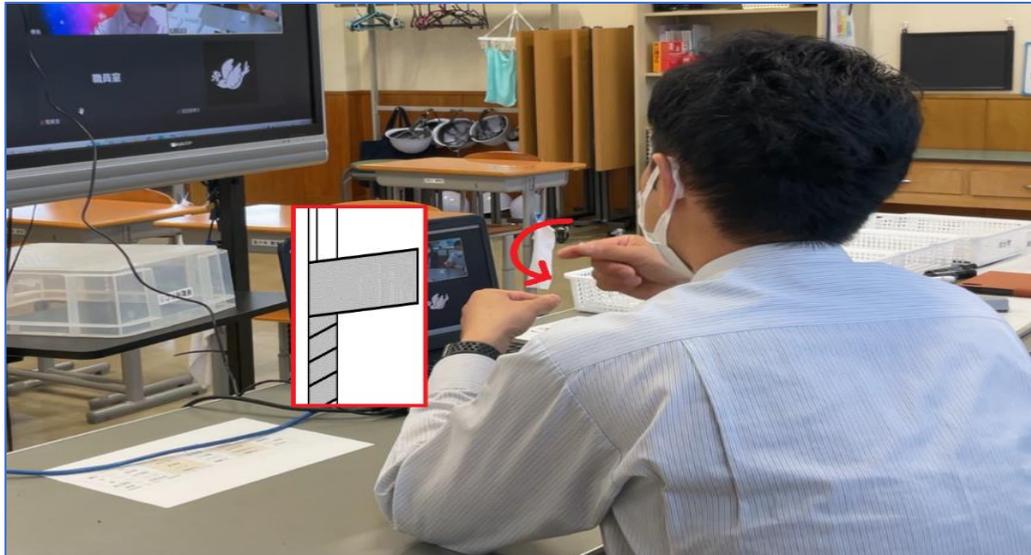
教師は、生徒の知的障害の状況を考慮した上で、さらにオンラインでも伝わりやすいように、イントネーションやスピードを誇張していた。

【記憶の喚起】

オンラインでは、言葉を中心としたやり取りとなりがちであり、この点は知的障害のある生徒にとって困難な点である。そのため、教師は、オンラインの動画において、実際に体を動かす等し、生徒の記憶を呼び起こしていた。

〈エピソード〉

教師	左の3本の指を棒線に見立て、右手でその3本の指にテープをぐるりと巻くような仕草さをしつつ「棒線を三本束ねてテープ貼るって」、再度同じ動作をして「結構、細かい動作だけど…明日、もし同じ仕事するってなると少しはスピード上げられそう？」と3回目の動作を行って問いかける。
生徒	「たぶんあげられそうです…」



このようなジェスチャーなどの非言語な事柄は、オンラインでの指導においても重要な役割を果たすと考えられる。この適応指導は、実習当日のその日振り返りを行うものであったが、例えば、適応指導の事前準備ができるのであれば、動画に作業状況を写真としてとったものを共有することや、紙面に書き写したも

〈エピソード〉

教師	左手の人差し指を1本立てて1束を表現し、「一束、何分かってたっけ？」と聞く。
生徒	考え込んで沈黙「…」
教師	質問を繰り返す「最初の一束、何分だったっけ？」
生徒	「…1時間ぐらい…」と不安げに回答。
教師	「うん、そうだね。それくらいかかってたよね。うん」
生徒	「はい」
教師	「それ、もっとスピードあげれば、何分ぐらいでできそう？」
生徒	「だいたい…3?40分ぐらいはできる…」と曖昧な返答。
教師	「だいがいくね…だいがいくね。わかった。」と過度な生徒の見積もりに戸惑いながら返答、「だいがいくね。わかった。じゃあ…じゃあ、ごめん、明日も同じ仕事をやるんだったら、まあ、その30分は、ちょっといきなり早くなるから、40分ぐらいに終わるように、目標をもって頑張ってください。」と伝える。
生徒	「はい！」

もちろん、対面での適応指導においても同様の関わりが重要であることはいうまでもない。オンラインであれば、単に動画に参加する（見るのみで主体的な思考につながらない）ことがあるため、特にオンラインだからこそ、具体的な目標を設定し、対象となる生徒の主体性を引き出すような関わりが行われていた。

のを補助的に用いることが有効であると考えられる。

【目標の設定】

教師は、生徒の活動に対する目標設定を意識した関わりを行っている状況が確認できた。

【認識の比較】

教師は、生徒の理解に配慮するために、例えば、体験前と体験後の状況変化といったように、比較するように指示していた。

〈エピソード〉

教師	「月曜日、実習どうですかと聞いた時、疲れましたというだけだったけど、今日、水曜日の時点では、疲れた以外に、今、感じていることありますか？」
生徒	しばらく考え込んで沈黙した後「仕事をするのは楽しいと思います。」

しばしば比較をすることで、知的障害のある生徒が具体的に体験をとらえることができるように配慮していた。これについても、対面での適応指導においても同様の工夫が行われていると考えられるが、オンラインだからこそ、この種の丁寧な比較を通じて、生徒の体験の想起や認識の促進を支援していると考えられた。

〈エピソード〉

教師	「仕事をしてて、どんなことが楽しいと感じますか？」
生徒	考え込んで沈黙「・・・」
教師	言葉が出てこない生徒の様子を見て、「どんな時でもいいよ。なんかできた時とか、うまくできた時とか。」と補う。
生徒	考え込んで沈黙した後「時間通りに終わらせた時に・・・」
教師	「ふーん」と回答に反応し、「そうだね、今日はね、時間内にやるよっていうことができたんだものね。」と生徒の認識を承認する。
生徒	「はい」
教師	「いいですね。達成感を感じているんですね。」と認識を言語化する。
生徒	「はい」

このように教師は、「仕事をしてて、どんなことが楽しいと感じますか？」→「どんな時でもいいよ。なんかできた時とか、うまくできた時とか。」→「そうだね、今日はね、時間内にやるよっていうことができたんだものね。」というように段階的に問いかけをせばめるようにしていた。

D. 考察

これらの5つの工夫は、オンラインでの状況下において、知的障害のある生徒の理解、記憶の障害と、この問題によって生じるコミュニケーション、学習機会、環境的制限を補うための工夫と考えられた。この工夫を理解することは、就労支援におけるジョブコーチングのあり方を発展させるための視点でもあると考えられる。これら工夫について、さらなる調査をし、工夫等を収集していくことは、テレワークに向けた支援及び訓練のあり方を検討する上で参考になると考えられる。

E. 結論

本研究では、特別支援学校における職場実習後のオンラインを用いた適応指導の分析を通じて、オンラインでのジョブコーチングの視点について抽出した。得られた①体験の言語化、②記憶の喚起、③目標の設定、④認識の比較、⑤オープンクエスチョン

【オープンクエスチョンからクローズドクエスチョンへ】

教師は、生徒の言葉を引き出すために、問いかけを「オープンクエスチョン」から「クローズドクエスチョン」へと変化させていた。

からクローズドクエスチョンへの5つの工夫は、対面でも有効な視点であるが、オンラインでの指導であるからこそ、より強調して取り入れる必要であると考えられた。今後のテレワークに向けた支援や訓練の一つとして、この種の工夫等についてさらなる整理分析が必要であると言える。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

Maebara K, Ymaguchi A (2023) A qualitative study of online job coaching for students with intellectual disabilities. 38th Pacific Rim International Conference on Disability and Diversity.

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

該当なし

引用参考文献

藤原志帆・倉田沙耶香・後藤匡敬・瀧川淳 (2021).

知的障害特別支援学校における「音楽づくり・創作」指導の試み：ICTの活用に焦点をあてて. 熊本大学教育実践研究, 38, 115-122.

<http://hdl.handle.net/2298/00043682>

水内豊和・青山真紀・山西潤一 (2018). 知的障害児

の体育科「立ち幅跳び」指導における ICT 活用の有効性. 教育情報研究, 33(3), 15-20.

https://doi.org/10.20694/jjsei.33.3_15

文部科学省 (2021). GIGA スクール構想の実現. (2021年 11 月 23 日 参 照)

https://www.mext.go.jp/a_menu/other/index_00001.html

澤田隆視 (2019). タブレット端末を活用した効果的な指導—知的障害特別支援学校における, 日常的な支援機器の道具として—. 帝京大学大学院教職研究科年報, 10, 41-47. <http://hdl.handle.net/10682/4312>

高津梓・奥田健次・田上幸太・田中翔大・生田茂 (2021) 特別支援学校における発話の困難な知的障害児の言語表出を促進する ICT の活用と継続. 特殊教育学研究, 58(4), 283-292. <https://doi.org/10.6033/tokkyou.58.283>

山崎智仁・水内豊和・山西潤一 (2019) 知的障害特別支援学校小学部における ICT を活用したダウン症児への国語科指導. とやま発達福祉学年報, 10, 57-61. <https://doi/10.15099/00019728>

全国特別支援学校知的障害教育校長会 (2016). 知的障害特別支援学校の ICT を活用した授業づくり. ジアース教育新社